

ダウンズ出帆から東南アジアまでの記録を削除し、バンタム出港後から日本への記録を編集して“The voyage of Captain John Saris to Japan 1613.”（『セーリスの日本渡航記』）に纏めました。そして1900（明治三十三年）年にロンドンのハクルート協会から刊行したのです。

しかし、サトウ自身が本書を編集して刊行する意図などはどこにも書かれていません。ただ、序文冒頭に unpublished slips of that monumental work（未完の記念碑的作品）という言葉があり、日英交流の草創期の重要な未発表資料と捉えていたことは確かだと思われま

す。そのため、サトウは本書の稿本の入手過程や航海の目的など、新たに自分が記した序文を全349頁からなる本書の冒頭から87頁にわたって掲載しています。これは、セーリスの日記形式の記述内容を学術的に補充する目的で書かれたものでもあり、セーリスの文章の理解度を高める意図で構成されたことが伺えます。

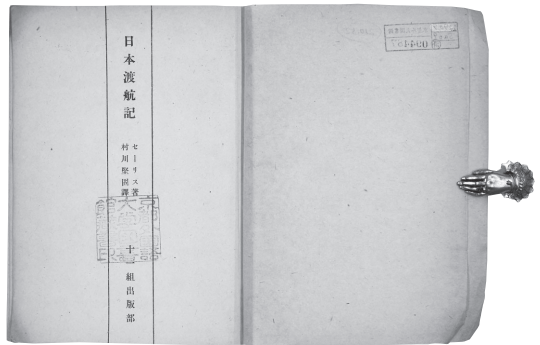
■日本語版の翻訳と出版

本書の日本語版は村川堅固氏の翻訳⁽²⁾で『日本渡航記』として、太平洋戦争の敗色が濃くなった1944（昭和十九）年の九月に東京の十一組出版部で公刊されました。

この翻訳本の中で、サトウの原著で序文にあたる部分は、全文ではなく大まかな翻訳になっています。また、全体の構成として村川氏はセーリスが駿府や江戸に滞在し平戸にいなかった時期のことについて、リチャード・コックスの日記やサミュエル・パーチャスの『巡国記』の記述を末尾に掲載して分かりやすくしています。

なお、奥付に記載された金額は四圓五拾銭で、式拾銭の特別行為税が加算され、計四圓七拾銭となっています。この特別行為税とは、戦局

が悪化した1943（昭和十八）年に導入された間接税です。本書が刊行されたのは1944（昭和十九）年の九月であり、終戦の11ヶ月前に刊行されたものであることが分かります。この時期になると、検閲を強硬に続けて外国の事柄に敏感であった当局も敵国とのかつての友好関係を扱った書物の出版を認めるのです。



セーリス著 村川堅固訳『日本渡航記』
東京 1944年（本学図書館所蔵）

その後、1970（昭和四十五）年になって村川堅固氏の翻訳は、岩生成一氏の校訂のもと現代仮名遣いにして『セーリス 日本渡航記』の書名で雄松堂書店の「新異国叢書」の第6巻として刊行⁽³⁾されました。本書では、サトウによる序文は新たに金井圓氏によって翻訳がなされ、付録として本書の後半で扱われています。これはサトウの英文に従った翻訳で、内容は次のようになっています。

第一節 稿本とその歴史。第二節 東インド会社はいかにして対日貿易を思いついたか。第三節 セーリスの前歴、航海のために彼が受けた訓令。第四節 イギリスよりバンタムまでのセーリスの航海。第五節 セーリスの航海より以前のモルッカ諸島におけるヨーロッパ人の商業的企業。第六節 バンタムより日本に至る航海。第七節 平戸、その貿易港としての前史。第八節 セーリスの日本滞在。第九節 セーリスの帰